東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

重要概念「つながり」を活かした教科等横断授業の開発と実践：保健体育科×音楽科の学際的単元からみる学びの拡張

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学附属国際中等教育学校 公開日: 2024-04-25 キーワード (Ja): ETYP:教育実践, STYP: 中等教育学校, 中3 キーワード (En): 作成者: 久保, 達郎, 飯田, 光一郎, 橋本, みゆき メールアドレス: 所属: 東京学芸大学附属中等教育学校, 東京学芸大学附属中等教育学校, 東京学芸大学附属中等教育学校
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000376

国際中等教育研究　第17号　p.15 ～ 26
東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

重要概念「つながり」を活かした教科等横断授業の開発と実践

―保健体育科×音楽科の学際的単元からみる学びの拡張―

Development and Implementation of Cross-curricular Lessons Based on Key Concept, “Connection”

「第３学年」グループ
外国語科　久保　達郎
音楽科　飯田 光一郎
保健体育科　橋本 みゆき

１章　はじめに

中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説総則編では,「生徒や学校, 地域の実態を適切に把握し, 教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」と述べられており，教科横断型な視点を持ってカリキュラム・マネジメントを実施していくことが求められていると考えられる。

本校では，国際バカロレア機構(International Baccalaureate Organization，以下，IBO とする)が提供する中等教育プログラム(Middle Years Programme，以下，MYP とする)の導入により，各教科授業の単元設計において重要概念やグローバルな文脈を設定した授業展開が実践されている。今年度の 3 学年研究グループでは，同一学年の授業を担当する異なる教員で構成されており，保健体育科，音楽科による教科等横断的な授業の実践を試みた。

２章　校内研究とテーマとのつながり

１節　保健体育

本節では，保健体育の授業の概要を説明する。

(1) 授業テーマ：感染症とその予防
(2) 重要概念「つながり」
(3) 関連概念「環境，ものの見方」

中学校学習指導要領解説(平成 29 年告示)保健体育編では，保健分野の目標を (1)「個人生活における健康・安全について理解するとともに，基本的な技能を身に付けるようにする」，(2)「健康についての自他の課題を発見し，よりよい解決に向けて思考し判断するとともに，他者に伝える力を養う」,「(3)「生涯を通じて心身の健康の保持増進を目出し，明るく豊かな生活を営む態度を養う」としている。

本実践では，感染症に関わる事象や予防法などから自他の課題を発見し，思考した解決策を他者と共有した後，自分たちだけでなく，多くの人に伝えていくための活動として「かるた」を作成す

ることにした。その活動を通して，重要概念「つながり」を考えていく。

感染症は，インフルエンザによる学級閉鎖やコロナウィルス感染症の世界的広まりを体験している生徒達にとって身近なトピックであるが，感染症には多くの種類があり，予防法や治療法が異なること等について，正しい知識がないと偏見や差別が起こることがある。「健康」と「環境」から社会の「つながり」を考えたり，年齢・性別・国・障がいの有無など，様々な「ものの見方」をすることから「つながり」を考えたり議論していく。その際，誰のためのかるたなのか，かるたを使うターゲットを想定し，ターゲットのためのかるたとはどのようなものか，どんなテーマにするか議論し作成していく。絵札と読み札を作成する過程では，ターゲットの視点に立ってデザインする。また，読み札を文字で記すだけでなく，音や画像をつけて作成することで，ターゲットの幅が広がり，多くの人と「つながり」を持てるかるたになると考えた。音楽科の授業と連携し表現の仕方を考案させていく。かるたを使うターゲットを決めることによって，この活動は，知識を身につけ深く思考するだけでなく，自他の健康に関心を持ち，アクションを起こすスキルを培うことにもつながると考えた。

さらに，自分の健康を保持増進することは他者の健康にどのように影響するのか，立場の異なる人が健康を保持増進するためにはどのような視点が必要かなど，議論しながらかるたに表現していく活動を通し，つながりとは何かを考えさせていく。この活動は，保健体育科の目指す，「健康についての自他の課題を発見し，よりよい解決に向けて思考し判断するとともに，他者に伝える力を養うこと」にも合致している。教科等の連携活動の中で重要概念「つながり」を考えさせていくことは，「健康」についてより深く探究することになり，さらに音楽的な表現によって多くの人へ伝えていくよい実践になると考えている。

２節　音楽

本節では，音楽の授業の概要を説明する。

(1) 授業テーマ：言葉と音楽のつながり

(2) 重要概念「つながり」

(3) 関連概念「表現，受け手」

音楽科では，保健体育の時間に学習した感染症に関わるかるたに音楽を加えることで，かるたを使用する受け手に，より効果的に内容を伝えることを目的としている。

本実践は中学校学習指導要領解説(平成 29 年告示)音楽編の「A 表現(3) ア 創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら，まとまりのある創作表現を工夫すること　イ(ア)音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴　ウ　創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な，課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付けること」の内容に該当する学習になる。

これまでこの学年の生徒は 1 年生の「詩や物語と関連のある音楽」で生徒自身が設定した架空のストーリーに基づく BGM をグループ創作し，２年生では「パターンを用いた音楽」で動機の工夫を生かした旋律の個人創作を行っている。また，３年生では「音楽と四季」で，季節に由来するイメージに個人で旋律を創作して思いを伝える活動で行った。様々なユニットでの学習を通して，どのような音楽表現ができるのか，どのようにすればより伝わる音楽表現になるのかを探究してきた。このように系統的な学習を積み重ねていくことで，生徒にとって苦手に感じやすい創作の領域でも意欲的に学習に取り組む姿が見られるようになっている。

今回はかるたの言葉や文章から連想するイメージを音楽表現へつなげる創作活動を行う。まず事実的な問いである「効果的にメッセージを伝えるための音楽を形づくっている要素は何か。」を考えることをきっかけに，創作アイディアを出し合い，作品の全体像をまとめる。創作における条件設定についてだが，各グループが設定した受け手によりよく伝える工夫ができるように幅をもたせることとした。例えば，読み札の前奏や BGM として，サウンドロゴのように言葉に旋律をつけて等，各グループで実践可能でより適切な手段を選択することとする。活動中は試行錯誤を繰り返しながら創意工夫する過程を大切にして，それぞれの思いや意図を伝えることの楽しさや喜びを実感できるようにする。

３章　授業実践の報告

第１次：感染症についての学習とかるたの絵札・読み札スライド制作

≪かるた制作の準備≫

今回の取組で保健体育科は関連概念として「ものの見方」を設定している。これは，かるたを使う対象者を想定して，その対象者に合ったかるたとはどのようなものかを考える活動を通し，様々な視点・立場から予防や対策を考え，自他の健康についてやその伝え方も探究していくことをねらいとしている。

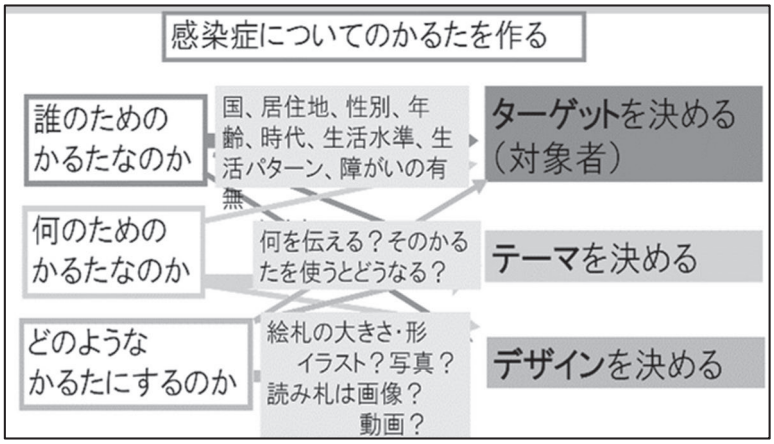

図１　授業使用スライド

かるたは，一人３作（絵札と読み札スライドを３セット）制作し，班８人で 24 作を１作品として制作することにした。それぞれ班で対象とテーマを決め，デザインしていった。

幼児を対象にした班は，スライドの文字をひらがなにし，消毒について伝えたい部分は消毒音を BGMに，たくさん寝ることが大切なことを伝えるために朝の目覚めを彷彿させるさわやかなものにしてイメージしやすいようにしようなどと計画し進めた。小学校高学年を対象にした班は，絵札の裏に説明を入れて学習できるようにし，読み札は低い音を組み合わせて感染症の恐ろしさを感じるような暗いイメージにしようと計画し進めた。

各自のかるたを班で合作し班内実践した際は，内容が伝わる絵札になっているかを班メンバー同士で見合い，アドバイスをもとに改良したり，似た内容の絵札が混合しないよう読み札文言の頭文字を変更したりするなど，対象が実践している状況を想定してさらなる工夫をする姿が見られた。

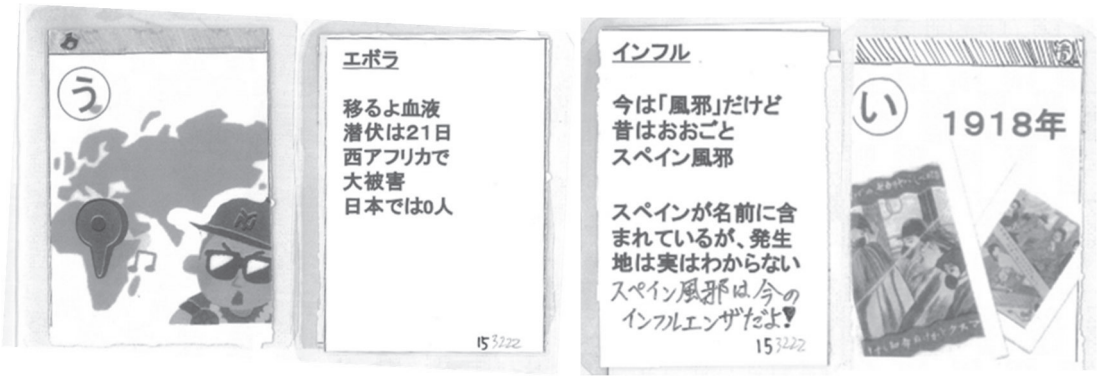

図２　かるた絵札作品

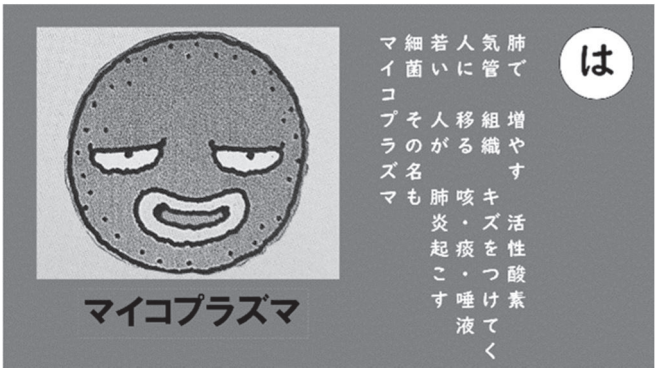

図３　かるた読み札スライド作品

第２次：かるたの音楽創作

≪音楽創作の準備≫

今回の取組で音楽科は関連概念として「受け手」を設定している。これはかるたの音楽が使用する対象を想定して，より伝わりやすい表現を探究していくことをねらいとしている。

そのため今回の創作では，かるたで伝えたい内容や思いを起点に言葉を決め，音楽の表現方法を各自で設定して音楽を形づくっている要素を知覚し創意工夫するという学習の流れをとった。創作の先に対象がいることを意識付けることでその後の創作で，方向性のブレが少なく集中して活動できた要因の一つになった。

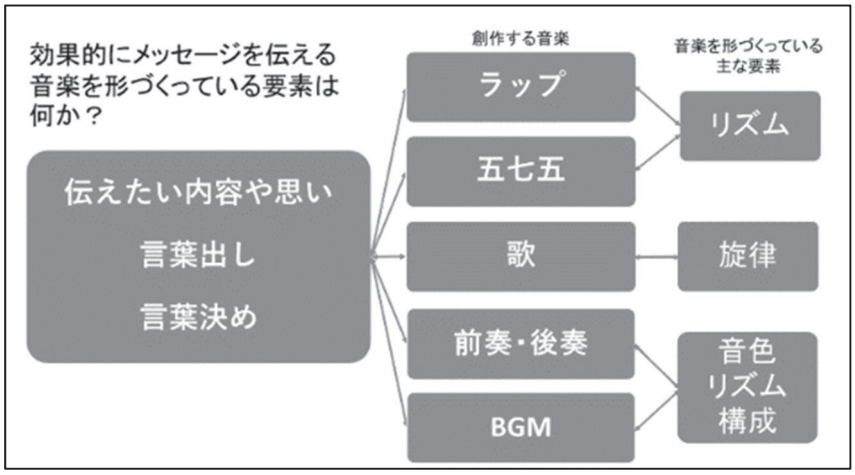

図４　授業スライド(音楽科)

≪かるたの音楽創作≫

対象を意識した音楽のアイディアを基に，これまでの学習で積み重ねてきたリズムや旋律の創作経験を活かして，それぞれが取り組んだ。各々で個性は出しつつもグループで一つの作品となることから，共通したリズムや効果音を用いるなどして，統一感も感じられる作品にしようとする工夫も見られた。

創作した音楽の中間発表では，意欲的にグループで活動する姿が見られた。対象の立場からアドバイスを伝えあうこととしたため,「ラップの言葉が速く，幼児には聞き取りづらいからもう少しテンポ設定を見直してみては？」,「音楽と言葉の音量バランスを整えた方がよさそうだから録音する後にチェックした方がよい」などの具体的なアドバイスで意見交換をしていた。また，旋律の最後の部分を２パターン準備して，受け手がどのように感じるのかを試している生徒もいた。中間発表を通してブラッシュアップする部分を整理することができ，その後はよりよい作品・表現になるための工夫を重ねていった。

図５　授業風景

≪創作した音楽の紹介≫

・生徒Ａの作品

中学生・高校生を対象としたデジタルかるたで，テーマを性感染症としている。かるたの内容は「体調が優れない時は早めに検査すること」を促すことを目的としている。生徒が創作した音楽はギターでコードの何回か演奏する作品となっており, カポを利用して１回ずつピッチを下げている。「ピッチを下げていくことで，不安げな感じ，あやしげや雰囲気を表現した」とコメントしていた。

生徒作品
（BGM）

・生徒Ｂの作品

４歳～６歳の子どもを対象としたデジタルかるたで，テーマを感染症の予防としている。耳に残りやすく，真似しやすいことを理由に，ラップを用いることにした。始めは言葉とベースの拍だけの予定だったが，仲間からのアドバイスから最後にシンバルの音を追加した。「シンバルの音で締めくくった雰囲気が生まれ，作品のまとまりが生まれた」とコメントしていた。

生徒作品
（ラップ）

第３次：かるたの実践

作成後，各班のかるたを生徒同士で実践した。PC 画面に読み札のスライド画像（映像）と音楽や歌がながれ，それを見て聴いて絵札を取り合う。幼児をターゲットとしたかるたでは，感染症の怖さを知ってしっかり予防していくために，少し大きな絵札にして広い場所で動きながら取る。様々な音やリズムから読まれる読み札とスライドに賞賛の声が上がり，幼児が楽しめるかるた作品になっていることが感じられた。

図６　授業風景

≪生徒の振り返り≫

関連概念『ものの見方』について

・ターゲットに伝えたいことという自分のものの見方，ターゲットの立場から考えた，伝わりやすいかるたという「ものの見方」について考えられた。

・多数の物の見方はこの学習を経て深く理解できたと思います。同じ内容でも，相手に合った言葉やデザインの選択を変える必要がありました。元々はカルタとは楽しむためだけだと思っていたが，学びとしても作れることを知ることができました。多数の方向からカルタという文化を見ることができて楽しかったです。

関連概念『受け手』について

・この授業で，実際に複数の感染症についてのかるたをやってみて，今まで読み札の頭文字だけで絵札を選んでいたことが，音があることで，音の特徴を耳で感じた上で，どの絵札を表現しているのかを考えられました。このことから，音だけから受ける印象は人によって違うけれど，絵札（言葉）も組み合わさることでわかりやすく表現され，受け手に特徴について強い印象を与えると思いました。

重要概念『つながり』について

・つながりは，物事に対する捉え方を変化させる。つながりを発見することは，複数の視点から考えることなので今まで見えていなかったことが見えるようになると思う。

・つながりとはあることでより深い学習につながるものだと考えます。知識を再構築する影響を与えると考えます。

・つながりについて考えることで相手の視点や他者の視点になりきって考えることができた。相手の気持ちや状況を理解することで違った視点や新たな気づきが生まれるきっかけとなった。特にカルタで赤ちゃんの病気についての読み札では短い文章で効果的に伝えることを意識しながら作成できた。

・誰か一人が欠けるとなりたたなくなるもの。サッカーでも一人欠けるだけで相手に対して不利な状況で戦わなくてはならない。チームスポーツでは特に繋がりが大事でこれらのことから誰か一人でもかけてはならない大切なものだと感じました。

4章　協議会の報告

研究協議会は以下の次第に沿って進行された。およそ 15 名の参加者と，講師として藤野智子先生（東京学芸大学教職大学院准教授）にご出席いただいた。

（1）研究授業について（学際的単元の説明，授業者振り返り，質疑応答）
（2）研究協議（重要概念について，グループワーク）
（3）指導助言

1節　研究授業について（学際的単元の説明，授業者振り返り，質疑応答）

はじめに，学際的単元の説明と本授業を実践するまでの経緯を説明した。新型コロナウィルスやインフルエンザの流行により，閉塞感のようなものに満ちた世界においては，感染症に関する差別や偏見を見聞きしたことも少なくない。保健体育科，音楽科双方の見方・考え方を働かせることによって，こういった現実社会での諸問題に迫ることができるのではないかと考えた。本授業実践で着目した重要概念は「つながり」である。人と人のつながりはもちろん，人と環境や，自己のイメージや感情など，様々なものが「つながっている」ということを生徒が再認識できるよう授業を構成した。続いて，授業者（保健体育科，音楽科）より授業の振り返りを行った。3 章に詳述しているのでここでは割愛したい。

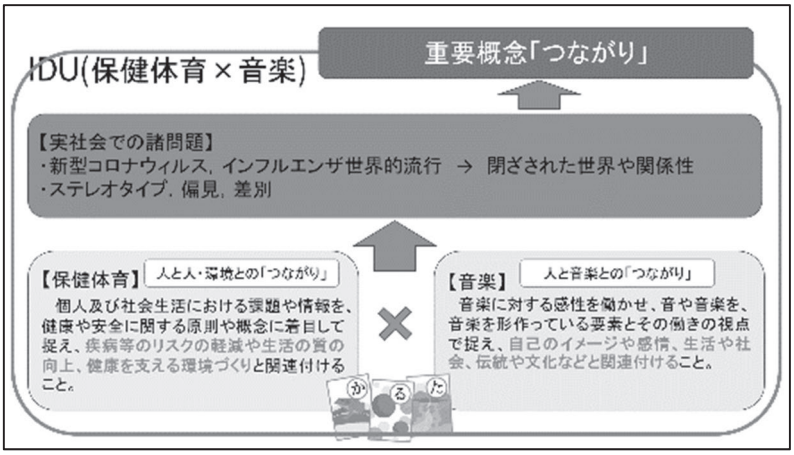

図 7　本授業実践における IDU のイメージ

2節　研究協議（重要概念について，グループワーク）

研究授業についての振り返りを終えた後に，本校 IB 委員長の浅井より重要概念(Key Concepts)についての説明をし，IDU の授業構築のワークショップを行った。「概念から考える教科等横断的授業」というテーマのもと，参加者は 3 名ずつのグループに分かれ，各々の校種や教科の特性を生かしてアイディアを出し合った。(図 8)グループワークのまとめとして，各グループで考案した IDU の授業アイディアの共有を行った。(図 9)例えば，技術・家庭科(家庭分野)と数学科が協働し，重要概念「変化」の理解を深める実践を計画したグループがあった。IDU の実践には，大掛かりな仕掛けは必要ではなく，教員間で何気なく話し始めることの必要性が感じられた。

図８　グループワークの様子

図９　授業アイディアの共有の様子

３節　指導助言

最後に，東京学芸大学教職大学院准教授の藤野智子先生より，①WHY，②HOW，③WHAT の３つの項目で，本実践に対する指導助言をいただいた。①については，なぜ概念学習を行うべきか，なぜ「学際的な」学習が必要なのかについて，②では，共同設計についてや，我々指導者がどのようにして「学び合うコミュニティ」を形成していくかということについてご説明いただいた。③では，本日の公開授業でどのような学びがもたらされたかを振り返った。短い時間ではあったが，今後の教科等横断的な授業実践に示唆を与えるようなお話をいただいた。

４節　参加者アンケートより

本研究会の終了後に，Microsoft Forms を活用して参加者アンケートを実施した。40 名弱の参加者のうち，15 名から忌憚のないご意見等をいただいた。その一部を紹介する。(原文ママ)本授業実践が肯定的に受け入れられたと判断している。

・IDU の授業を初めて参観させて頂きました。子どもが対象，目的を意識しながら，リズムやメロディーを考えている様子を見て，ただ音楽づくりの活動をしているのではなく，それを伝えるという視点が常に意識されていることが素晴らしいと感じました。
・生徒たちがみなリラックスしながら学びを深めていて，他者の意見に良く共感する姿勢が印象的でした。本校の学際も教員が頑張りすぎず，もっと生徒に任せたらいいのだと理解しました。
・公開授業Ｉとは異なる学年の授業を拝見しても，同様に生徒がいきいきとする姿が見られました。教科横断の視点を持つことが重要であることはわかっていても，実際にどのように行えばよいのか悩んでいたので，非常に参考になりました。
・音楽×保健という難しいコラボに挑戦している姿勢に感銘を受けた。教員(大人)が失敗してもいいから挑戦してみようとする姿は子どもたちにとって，大きな影響を与えることに気づかされた。
・学際的な単元のカリキュラムの作り方のうち，実社会とのつながりをベースに組み立てるという方法論が面白いと思いながら聞きました。ありがとうございました。
・自分の担当教科は美術なのですが，同じ実技系の教科として保健体育と音楽の教科横断型授業が本校の授業に活かせるのではないかと考え参加しました。参観前はイメージできない部分もあったのですが，当日いただいた資料や，生徒の皆さんの実際の取り組みを見させていただき，内容や授業の目的が理解できました。取り組みには音楽と保健体育だけでなく，国語科や美術科との関り

も見いだせ，教科横断というと 2 つの教科と考えがちでしたが，複数の教科に広げることができること，それにより「つながり」という概念を自然な形で理解できることがこのような形の授業の良さだと感じました。また，参観前は，教科横断はどちらか片方の教科教育をメインにして行い，もう片方はそのサポート的な役割を担うというイメージだけを持っていましたが，それだけではなく，中心に教科教育とは別の探究テーマを据え，それぞれの教科を，問題を解決していく手段として機能させるほうがより広いテーマを扱うことができるとわかりました。参観させていただきありがとうございました。

・生徒の相互フィードバックの際に，音楽的なことや，保健体育の既習事項をもとにしっかり意見を言えていて，IDU の良さを見ることができました。褒めることと改善案とをバランスよく提案できたり，アドバイスを受ける側も疑問に思ったことを逆に質問したりなど，日頃からフィードバックやコミュニケーションのあり方を指導されているということが伝わり，参考になりました。

・教科横断的な授業展開ということであったが，授業の目標の共有という点で保健体育の領域が薄いことが気になった。

5 章　おわりに

本授業実践では，中学 3 年生を対象に，保健体育科と音楽科による IDU を実施し，重要概念「つながり」の理解をうながした。生徒はそれぞれの教科の見方・考え方を活かして評価課題に取り組み，様々な事物に関する「つながり」を見出すことができたと考えられる。例えば，生徒の振り返りには，自分自身と周囲の物事との「つながり」がまとめられているものも多く，「つながり」を意識することで，目の前の事象を異なった角度から見つめ直すことができる可能性が示唆された。また，保健体育科と音楽科が協働で授業設計を行う実践は決して多くはない。指導者自身も，従来の枠組みにとらわれずに新たなことに挑戦する姿を見せることができたのは，大きな効果だと考えている。

一方で，本授業実践の課題も残った。保健体育科の授業を中心にかるた制作を行ったのだが，内容である感染症についての学習は教科に帰するものであるが，かるた制作そのものは保健体育科や音楽科の学習内容ではない。あくまでも生徒が学習したことを伝えるための手段である。しかし，生徒の中には，かるたを作ることに夢中になりすぎてしまい，教科特有の学習内容の理解や定着が不足している可能性が，参加者アンケートにて指摘された。さらに，授業時数の捻出も課題として挙げられる。保健体育科，音楽科ともに授業時数が少ない教科であるがゆえに，IDU に費やす時間を確保するためには他の内容で調整をするしかない。実践の実装化に向けて，年間指導計画の見直しなど，乗り越えなければならない課題があることも確かである。

参考文献

文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)総則編』東山書房，pp.49-51
文部科学省(2020)『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)保健体育編』東山書房
文部科学省(2020)『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)音楽編』教育芸術社

Development and Implementation of Cross-curricular Lessons Based on Key Concept, “Connection”

Abstract

The purpose of this study is to deepen students’ understanding of the key concept of “Connection” through an interdisciplinary unit between Health and Physical education and Music. Some of the student reflections indicated that their understanding of the key concept was promoted. On the other hand, there was some concern that working on co-designed lessons might dilute the subject-specific learning.

（資料）Unit Planner より抜粋

担当教師	橋本みゆき，飯田光一郎	教科と学問分野	保健体育，音楽		
単元名	多教科による IDU －概念「つながり」の視点から－	MYP の年次	4 年次	授業時数	１０

探究：学際的な単元の目的を確立する

統合の目的	
この学際的単元を通じて取り組み，理解を深めようとする実社会の問題： 病原体（感染症，人類との戦いの歴史）が環境を通じて主体に感染することで起こる感染症は，人類にとって一人ひとりの努力だけでなく，みなで協力して予防・対策をすることが，人々の健康につながりや健康な社会を作っていく。 統合的な目的に対する学問ごとの貢献： 「保健」：感染症についての理解や考えを深めて，その活動を通して周囲に発信していくことで健康への意識を高めていき，自他の健康を守っていく。 「音楽」：音楽的な視点から考える表現方法で効果的な音楽を形づくっている要素を用いることで，かるたの内容を受け手により伝わりやすく表現することができる。 統合： 学際的な学習プロセスにおいて，２つの教科の学習と経験を組み合わせて，感染症が関わる問題解決（つながりの分断，ディスタンス）のために，知識・予防・対策などを発信のためデジタルかるたを作成する。また，効果的な表現方法について，言葉のリズムや言葉の順番や韻の踏み方，全体のバランスはどのように関わっているのかといったように，さまざまな表現方法のつながりについて考える。さらに，成果物を互いに交流することを通して，周囲の人間や環境，実社会の問題のつながりを見出す。	
「重要概念」（または「関連概念」）	グローバルな文脈（および探究）
重要概念： つながり 関連概念：（保健体育）環境 ，ものの見方 （音楽）表現，受け手	アイデンティティーと関係性
探究テーマ	つながりは，私たちに影響を与える。
探究の問い	
事実的な問い： 自分だけでなく，お互いの健康を守るために必要なものは何か。（保健体育） 効果的にメッセージを伝えるための音楽を形づくっている要素は何か。（音楽） 概念的な問い： つながりは私たちにどのように影響を与えるのだろうか。 議論の余地のある問い： つながりはどの程度，影響を与えるのだろうか。	
総括的評価 ― 理解を示す学際的なパフォーマンス	
【規準 A】 評価 ・学問分野ごとの知識を情報源，作品，テクストの中で分析する ・学際的なものの見方を情報源，作品，テクストの中で評価する 【規準 B】 統合 ・目的をもった学際的な理解を伝達する作品を制作する ・自分の作品が学際的な理解を伝達する方法を正当化する 【規準 C】 振り返り ・自分自身の学際的な学習の発展を論じる ・新しい学際的な理解がどう行動につながるかを論じる	課題 生徒は感染症から学ぶ健康ライフへの理解を深めるため，目的をもった学際的な理解を伝達する作品(デジタルかるた)を制作する。

行動：学際的な探究を通じた指導と学習

<table>
<tr><th colspan="2">各学問分野の基礎</th></tr>
<tr><th>科目　保健体育</th><th>科目　音楽</th></tr>
<tr><td>内容
○中学校学習指導要領解説(平成29年告示)保健体育編
［保健分野］
(1)個人生活における健康・安全について理解するとともに，基本的な技能を身につけるようにする。
(2)健康についての自他の課題を発見し，よりよい解決に向けて思考し判断するとともに，他者に伝える力を養う。
(3)生涯を通じて心身の健康の保持増進を目指し，明るく豊かな生活を営む態度を養う。

・感染症について理解し予防や対処の方法を身につける。
・自他の健康や環境との関わりを考え，他者と共有する。
・学習したことを発信し合うため，ターゲットに合うかるたを制作する。
・作成したかるたを発表・実践し，自他の健康や心身の健康について振り返る。</td><td>内容
○中学校学習指導要領解説(平成29年告示)音楽編
「A 表現」(3)
ア 創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら，まとまりのある創作表現を工夫すること
イ (ア)音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴
ウ 創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な，課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付けること

・伝えたいかるたの内容やイメージを表現する音楽を創作する。
・音楽を形づくっている要素を活用しながら，表現を工夫する。</td></tr>
<tr><td>学際的な学習経験，形成的評価，指導方法
・感染症についての学習
・ターゲットの設定
・デジタルかるた音楽の創作
・デジタルかるたの制作
・デジタルかるた発表，評価</td><td>差異化
・身体的，聴覚的，視覚的を意識した成果物
・グループ編成の配慮
・学習を進めるための配慮(取組時間の確保)</td></tr>
<tr><td colspan="2">総括的評価
【規準 A】　評価：　スピーチ・ワークシート
※成果物についてエビデンスを用いながら分析を行う
【規準 B】　統合：　かるた作品
※作品の成功規準と照らし合わせの評価を行う
【規準 C】　振り返り；　レポート
※ユニットを通しての自身の学び方や取組の方法について振り返る</td></tr>
</table>

振り返り

単元の指導前	単元の指導中	単元の指導後
生徒は，健康に関する行動は自己管理が重要だと思っている。予防方法を知りそのための対策をすることはできるが，生活パターンが変化した時の行動や他者の健康については，自身の力でコントロールが難しいと思っている。	ターゲットのためのかるたとはどのようなものかと考える中で，相手の特性や自分の生活や行動等との違いを見つけ，相手の立場で健康を考える。共通点や相違点を見つけ，相手のためにどのように伝えるのか，その考えを仲間とどのようにして共有するのか，かるたを作成する過程で繰り返し議論し制作しなおす。様々なつながりに気づいていく。	学習した内容をターゲットに伝える・表現する活動を経て，相手の特性を理解しようとし，絵札や読み札の改良を繰り返す。より相手のためのかるたにしようと深く思考する。